

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	管23K04	氏名	古見 誠
研究主題 —副主題—	国語科における「関心・意欲・態度」の評価の現状と課題		
所属校	武蔵野市立大野田小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>本研究は、小学校現場の教師たちが抱えている「国語科における『関心・意欲・態度』の評価」に対する理解と、その経験年数による異なりを明らかにすることを目的としている。</p> <p>文部科学省は、生涯役に立つ意欲や態度を「関心・意欲・態度」という評価観点として設定し、その育成を重視させようとしている。しかし、その評価を行おうとすると、いくつかの疑問を感じる。その疑問が何に起因するのか、研究を進める上で整理をすると、以下の3つの背景が浮かんできた。</p> <p>(1) 心的特性という見えない部分の評価であること。  (2) 規準の設定が国語の教科特性により、曖昧になりがちな評価であること。  (3) 評価の意味づけが変化し、多様な意味を内包された評価となったこと。</p> <p>このような背景をもちながらも、指導要録の観点で示されている以上、学校現場では評価し、学期末には評定しなければならない。そのため、教師は、客観性や妥当性を高めるために多大な労力を費やしたり、逆に、曖昧な評価で済ませたりしている現状があると考えられる。この部分を、調査し、現場の教師は、国語科における「関心・意欲・態度」の評価を「どのように受け止め」、「何に困難を感じ」、「どのように実践しているのか」を明らかにし、改めて、この評価の課題を明確にしていった。</p>
II 研究の方法	<p>本研究を行うに当たって、教職大学院生と小学校教員（非常勤を含む）の100名を対象に調査用紙を配布した。その内回収されたのは、57名分（内、0～4年目20名、5～10年目19名、11～36年目18名）。</p> <p>これらの調査結果をもとに、必要に応じて聞き取り調査も行いながら、国語科における「関心・意欲・態度」の評価の現状と課題について分析をした。分析の際、分けた3つのグループは、技能の発達段階を考慮して以下のように分けた。</p> <p>(1) 0～4年目は、状況とは無関係に規則通りに振舞おうとしている段階。  (2) 5～10年目は、ある程度、目標に対して臨機応変に振舞える段階。  (3) 11～36年目は、状況に応じて適切な振る舞いができる段階。</p> <p>また、国語科の研究校4校の紀要に収められた33の指導案と、ホームページ上で公開されている4つの指導案、計37の指導案を比較し、分析を行った。</p> <p>それらの結果からみられる傾向について、先行研究や文献と照らし合わせながら、評価方法の検討を進めた。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>(1) 国語科における「関心・意欲・態度」の評価の困難</p> <p>選択項目では、「規準性」と「客観性」を課題としている様子がうかがえた。また、経験年数が増えるにつれ、評価する「タイミング」や「時間」に苦勞を感じなくなっていくことから、経験により要領を得ていくことが考えられる。</p> <p>(2) 国語科における「関心・意欲・態度」の評価方法</p> <p>選択項目では、経験年数が高いほど、「回数よりも内容」、つまり、「量よりも質」を重視している傾向がみられた。また、「テストの点数」の項目が高いことから、内容理解や習熟も考慮に入れて評価していることが予想される。</p> <p>(3) 具体的な記述内容からみる意識の相違と具体的な観点</p> <p>記述項目では前項と異なり、「内容」よりも「姿勢」や「回数」といった、視覚的に捉えられるもので評価している傾向がみられる。また、「A」評価と、「C」評価とでは、評価観点が異なっていることも分かった。さらに、内容は、どの教科にでも応用できるものが非常に多く、国語科に限定される内容は、250程の記述中、僅か15に満たなかった。</p> <p>(4) 国語科における「関心・意欲・態度」の評価頻度</p> <p>1単位時間に全員見切れないまでも、その単元の中で数回評価を行い、一人一人を確実に見ていこうとする姿勢がうかがえる。反面、「学期に1度思い出す感じ。」という回答も聞かれ、意識の違いが見受けられた。</p> <p>(5) 「関心・意欲・態度」の評価規準の位置付け</p> <p>37の指導案中、学習計画内の評価規準においても「関心・意欲・態度」を明記している指導案は13。また、全ての評価規準の文末表現が「読もうとしている。」など、方向や意志を示す表現が用いられていることが分かった。</p> <p>(6) 系統性からみる「関心・意欲・態度」の評価基準の比較</p> <p>「関心・意欲・態度」の評価規準に主な系統性は見られなかった。文言の違いはあるものの、どの学年でもほぼ変わらない内容で示されている。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>(1) 心的特性という内面を観察可能なものにして、評価を行っていかうとしているものの教師間の捉え方はさまざまである。</p> <p>(2) 経験年数の浅い教員ほど、身に付けさせるべき力が不明確になり、評価観点も汎用性の高い「学習スキル」評価になりがちになる。</p> <p>(3) 「関心・意欲・態度」の評価規準は、可視可能な形に表すことが難しく、規準の他に観点を操作的定義し、行動目標とは別に示すことが必要になる。</p> <p>現状を整理すると、「学ぶ姿勢」よりむしろ、「授業中の姿勢」を評価している傾向が強い。文部科学省がいう「生涯にわたって学ぶ姿勢」が育ったのかを見取るための規準として適切かどうかという点では課題が残る結果となった。</p>